



第二次世界大戦と日系アメリカ人

サツキ・イナ
小林 純子 訳

一．はじめに…日系アメリカ人三世として日本との交流によせる期待

ご紹介ありがとうございます。みなさん、お越しいただきどうもありがとうございます。この講演を通して、私は日米開戦以降日系アメリカ人がどのような経験をしたのかについて、私自身と家族の経験を中心にお話します。一家族の体験を通して、歴史をより親密で個人的な観点から学んでいただければと思います。

米国から二週間、家族、友人とともに訪問している最中ですが、その中に私の孫の世代にあたる子どもが八人参加しています。その全員がいわゆるハバ (Hapa) です。ハバとは混血を意味するハワイの言葉です。第二次世界大戦中の経験が私たち日系アメリカ人に与えた長期的な影響は、米国のエスニックグループの中でもとりわけ日系アメリカ人において、自分達のエスニシティ以外の人と結婚する割合が高いということにも表れています。八人の内の二人は日系とアフリカ系との混血で、もう二人は日系とインド系との混血です。のこりの四人は日系と白人との混血です。戦後、収容所から出た私たち日系アメリカ人は、米国社会に溶け込むためには日系以外のエスニシティの人たちと結婚しなければならぬと考えようになりました。これは私たちにとって大きな損失です。もちろん孫たちは皆素晴らしい子たちですが、私たちにとって母国であ

る日本とその文化的、歴史的伝統とのつながりを保ち続けていくことは容易ではありません。だからこそ、私たち日系三世、祖父母の世代の多くは、日本とのつながりを失わないように、孫たちを日本に連れてくるのです。このようなことから私は今日この場に立てることを本当に幸せなことだと感じます。

もう一つ私たちが失ったもので、私たち三世の間で顕著なのは日本語です。戦後、アメリカ人として認められ、生き残るために日本との関係を絶つことが必要だと思われてきた結果、私たちは日本語が話せません。心理学者としての私は、日系アメリカ人と日本語との関係を差別と排斥の歴史という文脈の中で理解しています。私の両親は日本とのつながりをとどめておきたくて、私たちを日本語学校に通わせましたが、私たちは日本語を学ぶことに抵抗を感じました。そのため私は五年間ずっと一年生のままでした。大学生になって、私は厳格な先生のもとで二年間、日本語の授業を受講しました。その先生は日系である私たちが、他の学生よりも速く日本語を習得できると思い込んでいたようで、漢字を覚えてこないと私たちを厳しく叱りました。現在の私の日本語能力では、トイレがどこかを聞くことはできませんが、難解な講義を理解することはできません。

日本語と関連してもう一つ私たちが失ったものは親がつけてくれた名前です。私が強制収容所で生まれた時、俳句の先生をしていた父は、五



月に生まれたことにちなみ、私を「さつき」と名づけました。けれども、収容所を出て米国社会に再定住した時、学校の先生たちは私の両親にこう言いました。もしこの子たちを本当のアメリカ人にしたいのなら、「アメリカ」の名前をつけるべきだと。私の兄の名は「潔」でしたが、彼は「ケニー」と呼ばれ、私は「サンディー」と呼ばれました。三十代で出生証明書に記載されている名前がそうではないことに気付くまで、私たちは「ケニー」と「サンディー」だったのです。私たちが失ったものは数多くありますが、このような私たちの体験をみなさんと共有できることを光栄に思います。私たち日系アメリカ人は自分達に降りかかった悲劇や喪失に手一杯で、同じ時期に日本で何が起きていたのかについてあまり学んでませんでした。同じことがみなさんにも言えるのではないのでしょうか。だからこそ今日、私たちの経験を共有することがすばらしいと思うのです。

二・日系アメリカ人の世代：二世、帰米二世

はじめに日系アメリカ人の世代について説明します。日本から米国にやってきた移民の世代を一世と呼びます。一世の多くは長子として土地などを相続できない次男、三男でした。一世が移民してきた当時、日本は貧しく、多くの若い男性たちは勇敢にも出稼ぎのために鉄道建設や農業の労働者として米国にやってきました。最初に一世の男性たちが米国に移民したのは一八六八（明治元）年のことで、ハワイのサトウキビ農園で働きました。

十九世紀後半から二十世紀初頭の米国では、一八八二年に施行された中国人排斥法の影響で中国からの移民の数が激減し、労働力不足が深刻な問題でした。そのため代替の労働力として日本からの移民が歓迎された一方で、日本人、日系人に対する差別は根強く残っていました。サンフランシスコの日本人街のような日系コミュニティが相互扶助のために

形成されましたが、その背景には日系コミュニティの外で、住居や職を得ることが非常に難しいという排斥の現実がありました。また、一世は米国にどれだけ長く住んでも、帰化市民となる権利を与えられませんでした。さらに多くの州で、自分たちと同じ人種以外、特に白人と結婚することが法律で禁じられていました。加えてサンフランシスコでは学校によっては日系人の子供たちが人種的に隔離されるところもありました。

一世の子供たちにあたる世代が二世です。米国で生まれ、学校に通い、中には大学に進学した人もいました。二世にとっては英語が第一言語でした。しかし親が一世だったので、アメリカ化された日本語とはいえず、日本語を聞き、話す能力もありました。米国の領土内で生まれた二世は生得の権利として米国の市民権を有します。そのため、土地所有の権利を認められていなかった一世は、市民権を持つ二世の名義を使って土地や不動産を購入しました。

私の両親は二世の中でも特異な経験を持つ帰米二世でした。帰米とは米国で生まれ、子供時代を日本で過ごした後、再び米国に戻ってきた二世のことを指します。父はサンフランシスコで、母はワシントン州、スポケーンで生まれました。その後それぞれの家庭の事情により二人とも子供時代の一定の期間、日本に送られ祖父母に育てられた後、再び米国に戻ってきました。帰米二世は日本で教育を受けているので、日本語を第一言語とし、英語は第二言語です。青年になった帰米二世が米国に戻ってきたとき、彼らは同世代の二世たちが自分たちとはあまり関わりを持ちたくないようだというのに気がきました。米国で偏見と差別に向き合わなくてはならなかった二世たちは、できる限り米国の主流社会に同化しようと必死だったのです。そのため帰米二世たちは自分たち自身でサブカルチャーを形成しました。多くが仏教会に入りました。日本の文学や芸術に関心を持ち、独自に文化的なグループ、またはスポーツのグループをつくりました。いわば彼らは日系アメリカというサブカルチャーの中に、帰米二世というサブカルチャーをつくったのです。

三、父、伊奈いたる

私は両親の体験を基に、『絹の繭から』(From a Silk Cocoon) (二〇〇五)というドキュメンタリー映画を作成しましたが、ここで父、伊奈いたると母、伊奈 三井 静子を紹介します。いたるは一九一三年に生まれました。いたるの父、私の祖父は山梨県出身でした。次男だった祖父は弟とコインを投げ、その裏表で北米に行くか南米に行くかを決めました。北米行きを勝ち取った祖父はサンフランシスコに渡り、日本街にたどりつき、『北米毎日新聞』という邦字新聞社で職を得ます。

当時のカリフォルニア州では異人種間での結婚が禁じられていたうえに、米国に単身移民してくる日本人女性ほとんどいませんでした。そこで祖父は写真花嫁とよばれる制度を使って結婚しました。米国で写真花嫁をさがす男性の多くは、借り物の高価な服を着こみ、自分のものではない高級車の前に立ち、できるだけ自分を裕福な男だと思わせようとする写真を撮りました。このような写真を日本に送り、写真を交換するだけで結婚してくれる女性を探してもらいました。想像してみてください。とても勇気のいることです。結婚を決めた女性たちは日本で代役の花婿と結婚式を挙げた後、上陸の際初めて自分の夫に会ったのです。夫に初めて会った多くの女性が泣き出したといわれています。私の父方の祖母も写真花嫁として渡米し、そこで初めて自分の夫に会いました。こうした写真花嫁たちの多くは到着時に一張羅の着物を着ていたそうですが、船を下りるや否や夫が用意してきた洋服に着替えるよう言われしました。着物で周りの米国人と違って見えることは歓迎されなかったのです。

その後私の祖父母は二人の子供を設けました。父のいたると妹のきよじです。きよじはとても病弱な子供だったので、健康に育たないのではと周りが心配しました。そこで祖母は二人の子供を連れて日本に帰ることにしました。このことはとても重要な点です。日米開戦後、米国政府

は帰米二世を危険分子とみなしました。帰米二世は天皇を崇拜するように教え込まれ、米国に戻った後、スパイとして日本政府のために働くために幼少時を日本で過ごした青年だと言われていたのです。ところがほとんどの帰米二世が日本に送られた実際の理由は、政治とは無関係な各家庭の事情によるものでした。私の父の家族に関して言えば、幼いきよじがとても病弱だったため、祖母は二人の子供を日本に連れて帰る選択をしたのです。

いたるは日本で小、中学校まで通いましたが、徴兵年齢に近づき、家族は彼が日本軍に徴兵されることを恐れました。そこで私の祖父は日本に戻り、米国市民権を持ついたるを連れて米国に戻りました。数年後、糖尿病を患っていた祖父は療養のため、息子をサンフランシスコの友人に託して日本に帰ります。ほどなくして祖父は亡くなり、船上で別れを告げた時が、父といたるが最後に過ごした瞬間となりました。

いたるはなかなかおしゃれな青年でした。他の帰米二世と仲良くし、支え合いました。仏教会での活動にも積極的で、日曜学校の先生も務めました。このことは戦争が勃発した時に彼が国家に疑いをかけられるも一つの要因になります。キリスト教徒であれば、それほど危険分子であるとか、国家に対する脅威としてみられることはありませんでしたが、仏教会と関わっていると嫌疑をかけられたのです。いたるは尺八も吹き、仏教会で行われる演劇をこよなく愛していました。役者としても活躍し、舞台経験に誇りを持っていました。



役に扮するいたる氏。

四、母、伊奈三井 静子

私の母は一九一七年にワシントン州東部のスポケーンで生まれました。母の父は鉄道会社で働いていました。こちらの祖母は写真花嫁ではなく、二人は日本で結婚し、共に米国に移民してきました。ところが祖母は三番目の子供を出産した時に亡くなってしまいました。祖父一人では二人の子供の面倒をみるのができなかったため、長野県に住む子供たちの祖母、キサに養育を託すために日本に行きました。小作農だったキサの一家は、貧しかったものの、静子にとってはキサだけが本当の意味での母でした。十三歳になったとき、静子は再び米国に呼び戻されました。静子の生い立ちも先ほどお話ししたような帰米二世の状況の一例で、日本に送られた原因は家庭の事情でした。帰米二世が日本に送られたのは、決して米国政府を転覆させるためとか、日本の軍国主義を幼少時から植え付けるためではなく、個々の家族の事情が主な理由でした。日本に行った後、そこで教育を受け、日本の文化や価値観などを身につけたのです。十三歳で帰米した静子は米国で学校に通います。静子は若いころから日記をつけていましたが、彼女の日記には十三歳で小学一年生から始めるの教室の椅子は小さすぎたので、先生たちが彼女のために特別な椅子を探さなくてはならなかったという逸話もあります。一方で静子は継母に対してあまり親密な感情を抱くことができず、父の新しい家庭にはどうしても馴染めませんでした。高校を卒業すると早々に家を出て、シアトルに向かいます。そこで裕福な白人の医者家庭で住込み女中として働きながら学校に通いました。学業を終えた彼女は、体調を崩した祖母の面倒をみるために日本に帰ります。

静子が滞在中の日本では、サンフランシスコで一九三九―四〇年に開催された万国博覧会（ゴールデンゲート国際博覧会）に参加する準備が進められていました。万博の日本館で、当時の日本の主要な輸出産業である絹の繰糸工程を実演し、紹介する四名のシルク・ガールの選考が全国規模で行われていました。シルク・ガールを夢見て一万名の女性が応募

募した中、美貌に加え英語を話すことができた母、静子がシルク・ガールに選ばれました。

万博の日本館の建設には莫大な人材と財力がつき込まれました。万博では日本と米国の政治家や官僚との間で多くの交流があり、特にサンフランシスコの日系アメリカ人のコミュニティは日米両国の関係を発展させていく手助けをおしませんでした。二世のリーダーたちは日本からやってきた役人や財界人たちの通訳も務めました。一方、最も人気のある建物となった日本館で母たちシルク・

ガールは来場者に繰糸工程の実演と解説をしました。当時の米国では、女性たちが絹製のストッキングを愛用していたため、絹がとても重宝され、大きな関心を持たれていました。



シルク・ガールとして絹の絞りのドレスを着て、サンフランシスコ万博、日本館で繰糸の実演を行う静子氏。

この万博中に母の腕時計が壊れたのです。母は付添人に案内されて、日本街に時計の修理に出かけました。その時計を修理した人が、父の尺八の先生で、いたると静子が出会います。お互いに一目惚れでした。後に父が私に話してくれたことですが、帰米二世の男性はみな、日本からやってくるシルク・ガールをお目当てに、万博に足しげく通い、一日中日本館やその周辺をうろついていたそうです。ですから母は彼女の腕時計が壊れた日を、父にとって運が良かった日と呼んでいます。こうして二人は恋に落ち、結婚することを約束しました。一九四〇年のことです。母は万博の報告など、シルク・ガールとしての仕事を終わらせるために一度日本に帰らなければなりませんでしたが、その後米国に戻り、いとと結婚し米国で暮らすことを約束しました。日本で、静子は年老いても弱くなった最愛の祖母、キサにお別れをしなくてはなりませんでし

た。

美しいシルク・ガールの一人が、彼女にふさわしい資質を備えた婦米の独身男性を選んだということ、また、さまざまな劇に出演するいたるが人気者だったこともあり、婦米二世のコミュニティは二人の結婚を大いに祝福しました。結婚式は一九四一年三月にサンフランシスコの仏教会で行われました。結婚式の記念写真は着物姿で、静子はシルク・ガールのために新調された鮮やかな濃いピンク色の着物を着ました。



恋におちた二人。

五、日米開戦と日系アメリカ人の強制退去、収容

二人の挙式から数か月後、二人をとりまく状況は一変します。日本軍により真珠湾が攻撃され、米国は日本に宣戦布告したのです。真珠湾攻撃は現地時間で十二月七日に行われましたが、翌八日には米国連邦捜査局（FBI）の捜査官が日系アメリカ人のコミュニティのリーダーたちの多くを逮捕、連行しました。米国政府はそれ以前から何年にもわたり、日系アメリカ人のコミュニティのリーダー（特に一世）の情報を収集していました。米国政府の諜報の対象となった彼らのほとんどは仏教会や日本語学校と関わりがありました。

その後、日本軍による米国西海岸への侵攻を恐れたルーズベルト大統領は、ワシントン、オレゴン、カリフォルニア三州の西半分を、強制退去の対象となる軍事区域と指定する大統領令に署名しました。日本人の血

が四分の一でも入っている人は皆、軍事区域からの強制退去を命じられ、東の内陸部へと移されました。その理由は、彼らが国家の安全に対する危険要素であるいうものです。一世が真っ先に疑われ、その次に婦米二世が疑いをかけられました。しかし実際には、日系アメリカ人の強制退去、収容に至った数々の政治的判断は、人種差別主義と特定の団体が得る経済的利益に基づいていました。例えばサンフランシスコ近辺の孤児院では日本人の血をひく子供たちも退去の対象となりました。「国家の安全への脅威」とされたその子たちは収容所に移されるため、孤児院にとっては経費が軽減できるというわけです。

強制退去の告知は西海岸の各地で電柱などへの貼り紙で行われました。まず日系アメリカ人が外出できる範囲が指定され、夜間外出禁止時間、登録の際に、その後、収容期間数年にわたって身元確認に使用された番号を渡されました。自分の名前の代わりに番号で呼ばれることがどれほど非人間的なことか考えてみてください。自ら経歴を語ることがなかった私の両親ですが、当時のモノを大切に保存しており、番号札「一四九一一」も大切に保管されていました。

収容所には自分たちの手で持てるだけの荷物しか持ちこむことがで

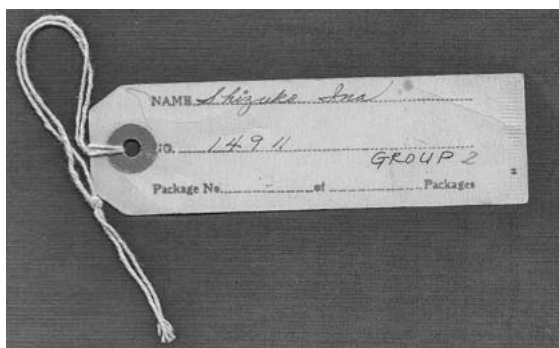


著名な米国の写真家、ドロシア・ラング氏撮影の静子氏。登録のために並んで、前方をうかがっている静子氏の背景に、強制退去の告知に使われたポスターが貼られている。



きなかったので、七十二時間以内に収容所に持っていけない財産を処分しなければならなかった人もいました。多くの農業従事者は二世の子供たちの名義で土地を購入してきましたが、その土地も売り払わなければなりませんでした。土地を手放さなかった場合も、収容中に固定資産税が払えず、政府に差し押さえられてしまいました。収容期間が四年半に及ぶ人もいましたので、釈放後、自分の土地に戻っても、自分がもうその土地の所有者ではないと知らされるだけでした。私の両親はサンフランシスコに住み、家や農地こそ所有していませんでしたが、強制退去にあたり、新婚生活で使用していた家財道具を仏教会の倉庫に保管しました。けれども退去後数日もたたないうちに倉庫は押し入れられ、多くのものが盗まれ、二人は倉庫に入れたものすべてを失いました。

強制退去、収容の体験者たちは、自分たちの土地や財産をどのように失ったかということをよく語ります。収容所にはペットを連れていくことができず、友人とも引き裂かれました。通っていた学校もやめさせられた最大のものはいかということを考えると、それは尊厳です。同時に自分たちが生活してきた国に対する信頼も失ったのです。生きる目的をも奪われました。手に持てるだけの荷物を持つてくるよう指示されたものの、どのような環境に、どのくらいの期間収容されるのかは何も知らされなかったのです。



強制退去、収容の非人間性を象徴する番号札。イナ氏一家に割り振られた「14911」番がみえる。

加えて米国政府は私たち日系アメリカ人に何が起ったのかを全くくめてしまうような言葉を使用しました。実情をより反映した強制収容所という言葉は使わず、私たちのことを囚人とも呼びませんでした。私たちは「Internees（被抑留者）」と呼ばれ、一二万近くの人々が収容された強制収容所を「pioneer communities（開拓者のコミュニティ）」とさえ表現したのです。米国政府は多大な労力をかけて、言葉の力をもって私たちに実際に何が起っているのかを歪曲しようとしました。そのため、私のような当事者でさえも、自分達が経験したことを正しく理解できるようになるのに数十年の年月を要したのです。

立退きの日、サンフランシスコの集合場所に集められた日系アメリカ人は武装する兵士にバスまで誘導されました。自力で歩けないような人も、病院から担架で運ばれて収容所行のバスに乗せられました。バスは突貫工事で準備された仮収容所に向かいました。後に彼らが移される、より恒久的な収容所はまだ建設途中でした。仮収容所は競馬場や農産物品評会を開くような広場など、何千人もの人々をすばやく詰め込むことのできる場所に設置されました。私の両親はタンフォランという競馬場に送られ、厩舎での生活を強いられました。これからの人生や家族設計という夢や希望に満ち溢れていた新婚の二人は、今や犯罪者同然の扱いを受けたのです。厩舎の壁は漆喰で真っ白に塗られてはいたものの、地面には糞や馬糞が残る非衛生的な環境でした。私の母はタンフォランに収容された時には妊娠していて、重いつわりを経験したそうです。後に彼女は様々な体調不良にみまわれますが、馬の糞尿の臭いが残るこの劣悪な環境が根幹の原因だと感じたそうです。

こうした環境の過酷さに加え、つわりと初めての出産に対する不安とで大変な思いをしていた母でしたが、そんな彼女を大きく励ました小さな出来事がありました。クエーカー教徒による人道支援団体、アメリカ・フレンズ奉仕団（American Friends Service Committee）の女性たちが毎週タンフォランを訪ねてきました。彼女たちは収容所を囲むフェンスのところまでやってきて、果物や野菜などを差し入れとしてフェンス越しに投げ入れました。その中で私の母が妊娠していることに気付いた一

人の女性は次の日に戻ってきて、母に手招きました。女性は手縫いのキルトをとりだし、それをフェンス越しに母に向かって投げ入れ、こう言ったそうです。「これが少しでもあなたの役に立てばいいのですが」

私は今もおこのキルトを大切にしています。もうボロボロのキルトです。私の母は晩年になってもずっとこのキルトを自分のベッドの上に掛けていました。あまりに古びていたので、私はある日捨てることを提案しました。母は絶対にダメだと言うのです。このキルトが収容所生活に関わっていることは私も知っていましたが、なぜそんなにもこのキルトに執着するのか、その時尋ねました。収容所の外にいる人の中にも心配してくれる人はいるということを思いださせてくれたから、と母は答えました。

近年、キルトは人々の様々な体験を「お話」として語り継いでいく芸術表現として高い関心を集めています。ここで現在の米国社会で私たち日系アメリカ人の「話」を語り継いでいくことの重要性について触れておきたいと思います。現在、トランプ大統領の発言が日系アメリカ人を貶めるために使われたものと非常に類似していることに対して、私たちは深い危惧の念を抱いています。このことに抗議の声をあげるために、日系アメリカ人の経験についての情報を提供するフェイスブックのグループを立ち上げました。そこに母のキルトのお話と写真を紹介したところ、大変大きな反響がありました。最も強く関心をよせたのはキルト作成の愛好家たちでした。

話を仮収容所に入れられた私の両親の体験に戻します。二人は仮収容所であるタンフォランから、ユタ州に建設されたトパーズ収容所へと移されます。そこでは約一万人の人々が砂漠同然の不毛な環境につくられた安普請の収容所生活を強いられました。夏はうだるように暑く、冬は耐えがたいほどに寒い地です。板切れと防水用のタールを染み込ませた重い紙だけで建てられたバラックは、室内でも風が吹きさらし、トパーズで頻発した砂嵐の際には室内まで砂が吹き込んできました。人々は寝ている時に室内に入ってくる砂塵を吸い込まないように、濡れた布を顔にかけて寝たそうです。

米国全土十か所にこうした収容所が建てられましたが、完全に孤立した場所に建設されたので、逃げることは不可能でした。逃げていく場所がないからです。逃げようものなら、おそらく餓死が待っていたことでしょう。このような環境で私の兄、潔が生まれました。かつて私は母になぜ収容所の中で子どもを産んだのかと聞いたことがあります。二人とも幼くして親を亡くしているので、父も母も家族を持つことを強く望んでいたからだとは母は答えました。また、家族であれば収容されても引き裂かれることはないのではと考えたとも言いました。

六. 忠誠登録と父との別離

しかし現実には家族であっても引き裂かれたのです。ここで簡単に私たち一家のたどった道を説明します。私の両親と長男の潔はトパーズ収容所からカリフォルニア州北部にあるトューリ・レーク収容所に移されます。トューリ・レークで私が生まれますが、その後父は、妻と幼い二人の子から引き離され、単身ノースダコタ州ビスマークにあるフォート・リンカーン収容所に送られます。さらにニューメキシコ州のサンタフェ収容所を経て、最終的に父はテキサス州のクリスタルシティ収容所で私たちと再会し、その後私たち一家は釈放されました。

父が家族から引き離された事の発端は一九四三年の二月にすべての収容所内で行われた「忠誠登録」という調査にあります。忠誠登録は私たち一家だけでなく、その後の日系コミュニティを分断するような、大きな影響を与えました。忠誠登録が行われた理由には次のような要因があります。無実の人々が法の適正な手続きも経ず、数年間にわたって監禁されていることが問題でした。米国自由人権協会(American Civil Liberties Union)などの団体は日系アメリカ人の強制収容が米国憲法に抵触するのではないかと、強制収容が国家の安全保障という理由で正当化できるのかという疑義を持ち始めていました。米政権もまた、これほどの大人数を長期にわたって強制収容し続けることは法的に無理があるの



ではないかと懸念し始めていました。さらに一二万人近くの人々を収容し、食べさせていくための膨大な費用についても憂慮していました。

米政権は収容されている人々を順次釈放したいと考える一方で、日系アメリカ人ではない米国民が釈放に反対することを考慮する必要がありました。日系アメリカ人が収容所に入れられている今、一般の米国民は日系人のことを犯罪者で、危険だと思っています。日系人が釈放されれば、このように危険な人々を自由に、我々はどうなるのだ、日系人は釈放すべきではないと反発するでしょう。こうした反発への対応として、政権は、実は無実の人々を収容したのだと証明する必要があります。その手段が忠誠登録です。収容所の日系人に米国に対して忠誠であるか、敵、つまり日本と戦う意志があるか、そして日本の天皇には忠誠は誓わないと約束できるかと聞くことにしたのです。当時米国軍と日系人との関係もとても複雑でした。真珠湾攻撃直後には、多くの日系アメリカ人の男性が自分の国を攻撃した敵、日本と戦う兵士になろうと志願しましたが、米軍の方が彼らを拒否しました。戦前すでに入隊していた人は除隊になり、志願者は入隊を許されず、その代わりに収容所に入れられたのです。

忠誠登録はアンケートに答える形式で行われましたが、その中でも特に問題になったのが質問二十七と二十八です。

二十七 貴方は米国軍に入隊し、命令があればそれがどこであっても進んで任地に赴き、戦闘任務を遂行しますか。

二十八 貴方は米国に対して無条件に忠誠を誓い、国内外のあらゆる攻撃から忠実に米国を守り、また、日本の天皇および他の外国の政府、権力、組織に対するいかなる忠誠や服従を断固として否認しますか。

どちらの質問にも肯定的に答えれば、まるで魔法でもかけられたかのようにその人は忠誠なアメリカ人となり、二年と数か月に及ぶ収容所生

活から解放される手続きを開始できるのです。一方で、この二つの質問に「No」と答えた人は「不忠誠」のレッテルを貼られました。通常、不忠誠とは自国の政府に対して不利益となる行為をすることです。しかしこの状況で、多くの人々は、自分の国に対する希望、いいかえれば米国のために自分と自分の家族が安全に暮らしていける希望を完全に失ってしまったために「No」と答えました。「No」と答えた多くの人は、当初日本に送還されることを望んでいました。

私の両親はトパーズ収容所で行われた忠誠登録に「No」と答え、「不忠誠」者としてトューリ・レーク収容所に送られました。忠誠登録以降、トューリ・レークは「不忠誠」者を収監する隔離収容所に指定されました。二人はそこで米国民権を放棄し、自分たちの生活を立て直すために、日本に送還されることを望みました。満州に移住することさえ考えたそうです。

忠誠登録への回答や国籍放棄の申請など、今後の人生を大きく左右する決断をしなければならなかったとき、収容所の中の日系人は、自分たちの決断が法的にどのような結果を招くことになるのかなどの質問を弁護士などの専門家に相談することも許されませんでした。当時の戦況、敗戦間近の日本の現状について正確な情報も入手できない状態で結論を出すことを迫られたのです。

「不忠誠」者の隔離収容所となったトューリ・レークの警備はさらに物々しくなり、監視塔や警備兵の数が大幅に増やされました。住環境や労働環境も劣悪になっていきました。収容者が抗議行動をとったこともあり、その際には米軍が出動し装甲車が投入され、戒厳令まで敷かれたのです。

人々の不満が募るトューリ・レーク内で一世の若い男性と婦米二世が中心となり、後に奉仕団と呼ばれる報国青年団が結成されました。父もその中の一人でした。団員の中には日本に一度も行ったことのない、米国の失望した二世も含まれていました。はちまきをして、「ワッショイ」という掛け声とともに、収容所内を軍隊のように行進したり集団で体操したりする彼らに、収容所当局は恐れをいきました。まもなく当局は

奉仕団のメンバーを逮捕し始めます。収容所内の混乱を收拾するために、これらの男性たちを強制的に所内から取り除こうとしたのです。こうして私の父を含む多くの男性たちは家族から引き離されることになりました。逮捕された男たちはトューリ・レーク収容所の中に新しく作られた拘置所に入れられ、そこでバットで殴られるなどの過剰な暴行を受けたそうです。

トューリ・レーク収容所内の拘置所に入れられた大多数はすでに米国民権を放棄していました。彼らは今や敵性外国人、つまり米国が戦争状態にある国の国民であるという位置づけです。そのため彼らは戦時転住局という文民が統制する日系アメリカ人を対象にした強制収容所から、司法省が管轄する敵の捕虜や敵性外国人を収容した収容所に移されることになりました。私の父はトューリ・レーク内の拘置所から司法省管轄のノースダコタ州フォート・リンカーンに送られました。私はその時二歳、兄は四歳で、母と三人でトューリ・レークに残されました。父不在の中、私と兄は水疱瘡にかかり、バラックの一室に六か月間隔離されました。

父が送られた司法省管轄の収容所は、戦時転住局が管轄する収容所とは異なり、しっかりとした煉瓦造りの建物で、暖房装置もありました。ブルやスケートリンクさえ備わっていました。敵性外国人としてジュネーブ条約が保障する一定の生活水準を保つことのできる環境で、収容者たちの待遇も戦時転住局の収容所でのそれよりもはるかに良いものでした。対照的に、母と私たち兄妹が収監されていたトューリ・レークは、司法省の収容所のように準拠すべき法律や基準が皆無だったのです。

このように別々に収容された両親は手紙をやり取りして意思疎通をはかりました。しかしそれらはすべて検閲を通されました。父が亡くなった後、母と私とで父の机を整理していた時のことです。下の引き出しの奥の方からひもで縛られた手紙の束が出てきました。それを見た母は「お父さんが私からの手紙を全部しまっていたなんて、知らなかった。ここら辺りに私もお父さんが書いた手紙をとっておいなはず」と言いました。今私の手元には両親がお互いに送り合った手紙一八二通があります。検

閲の結果、手紙の多くの部分が黒塗りにされてあります。

戦況は進み、日本に原爆が投下され、日本は降伏します。敗戦後の日本の現状を知る人

たちは他の日系人に、日本でできることは限られていて、足手まといにならないために、日本には戻らないように忠告します。日本が負けてしまった今、私の両親は行き詰まりました。当初、父はまだ日本に戻る気でいましたが、母は私たち幼い子どもにとって日本は危険すぎると考えました。両親は葉書一枚でさえ自由にやり取りできない状況の中、家族の今後をどうするかという決断をしなければなりません。父はベッドのシーツを引き裂き、その布に手紙を書きつけ、布を折りたたんでズボンの腰回りの裏布の中に縫い付けました。そうしておいて「このズボンがきつすぎるので、腰回りを少しゆるめてほしい」とメモを添えて母に送りました。このようにして検閲をかくくくつて送られた四通の布の書簡が残されています。父のいるフォート・リンカーンでは



いたる氏が連れ去られた後の静子氏とキヨシ氏、サツキ氏。収容所の中で写真撮影が認められたのはヨーロッパ戦線で戦った二世兵士が収容所内の家族を訪ねてきた時だけだった。二世兵士訪問の情報を得ると、特に子どもを持つ親はこうした写真をとってもらうために、二世兵士の家族のブロックに殺到したという。



静子氏からいたる氏にあてて送られた書簡。検閲を受け、一部黒く塗りつぶされている。

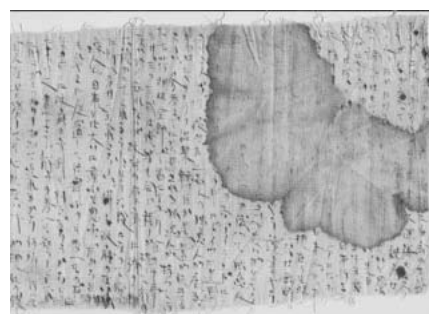


釈放後のイナ一家。

日系アメリカ人は収容所から釈放された後、生活をゼロから立て直さなければなりませんでした。それでも自由ほど素晴らしいものはなかったのです。釈放時には各自に二五ドルと目的地までの汽車の切符が支給され、私

不穏分子を追いだすために、本人の意志に関わらず、皆が日本に強制送還されるのだと噂されていました。日本には帰らないという母が父を説得しました。

一八か月にわたって私たち家族は別々に収容されましたが、終戦から数か月後、一家はようやくテキサス州のクリスタルシティ収容所で再会することができました。釈放されたのは一九四六年のことです。「なんと喜ばしい日か。ついに釈放。一九四六年七月」と母の日記に記されています。両親は日本への強制送還を覚悟していました。多くの人が実際に強制送還される中、どのような理由かはあまりよくわからないまま、偶然に恵まれて釈放され、米国にとどまることができたのです。一方、日本に帰った人々は多大な苦労を強いられました。敗戦後の日本の国情は酷く、迎えた家族、親戚にとっても食糧難の中、養わなければならない人数が増えたというところで、彼らの帰国は歓迎されなかったことが多々ありました。



検閲をかくぐるためにズボンのベルト通しに隠して送られた、いたる氏から静子氏に宛てた布製の書簡。

たち一家は父の親戚がいたオハイオ州シンシナティという町に向かいました。出所後、母は収容所当局に、使い残した食事券を丁寧なお札状を添えて送り返しました。この行為を礼儀正しい日本的な女性の行いだと解釈することもできるでしょう。しかし私には、少しでも間違ったことをすれば、またいつ何時収容所に入れられるかわからないという両親の恐れを反映した行為に思えてなりません。こうした恐怖、間違いを犯すことへの恐れがその後の両親の人生を大きく形成しました。間違いを犯さず、誰の気分を害することなく、勤勉に働き、子供たちが社会のルールに従順に従うよう細心の注意を払ったのです。

父は一九七七年に六十二歳で他界しました。強制収容を体験した日系アメリカ人の男性は非常に多くのストレスを抱えこんだため、早くに亡くなる人の割合が高いという研究結果も出ています。彼らはコミュニケーションや家庭におけるリーダーとしての立場を失いました。このように自分の影響力や管理能力を失ったことは、多くの人の自我や自尊心に壊滅的な打撃を与えました。私が生子どもの頃、父が電話に应答することはなく、私たちが電話に出なくてはなりませんでした。帰米二世だった父の英語には日本語話者特有のアクセントがあり、それを隠すことができないことがわかっていて彼は、電話で話すことを危険だと考えたのです。

（日本語）私にとって近いようで遠い日本のみなさんとうこうしてお話しできてうれしいです。このような機会がこれからも続くことを祈ります。ありがとうございます。

質疑応答

小林 最初にご説明したように、ここからは対話の形式で進めてまいります。残り一〇分程度となりましたので、事前に学生が準備してくれたコメントや質問から僭越ながら私が選んだり、集約したりしたものをイナ先生に質問し答えていただきます。

最初の質問は私の授業を受講している学生からの質問ですが、ここに

いる多くの学生の反応を代弁するものではないかと思ひ選びました。「私は日系アメリカ人の経験や歴史についてあまりよく知りません。戦争中の日本の兵士や日本人の体験については勉強してきましたが、日系アメリカ人の人たちの経験については全く知りませんでした。日系アメリカ人の経験について知ることで、戦争のトラウマを経験したのは日本人だけではないのだと気付きました。もう少し深くこれから学んできたいです」英語を勉強し、海外留学などを経験していくであろう学生たちに対し、また、この講演を聞いてさらに日系アメリカ人のことについて知りたいと思う学生に対し何かアドバイスなどをいただけますか。

イナ 日系アメリカ人の経験についてみなさんが知らないというのは理解できます。私たち日系アメリカ人自身でさえ自分たちの経験について語ってこなかったからです。米国政府も語りませんでしたし、学校の教師も語りませんでした。最終的に一九八八年に米国政府は公式に謝罪し、生存している収容体験者一人当たりに対し二万ドルという象徴的な賠償補償金を支払いしました。それは私たちのコミュニティに大きな影響をもたらしました。高齢の人から順番に補償金が支払われましたが、父はすでに他界していました。母が補償金を受け取ったとき、母に電話すると、さうと、小切手は受け取ったわ、と言いました。後日、母を訪ね小切手はどこかと聞くと、そこら辺に置いてあるというそつけない返事でした。私が小切手を見るために書斎に向かうと、書斎の壁にはすでに米国大統領からの謝罪の手紙が額に入れられて飾ってあったのです。政府の謝罪がどんな意味を持つのかを母にたずねました。「やっと自分の顔を取り戻せたように思う」(“I got my face back”)が、母の答えでした。

戦争の結果私たちがこうむった最大の損失の一つは、自分たちの祖先の国である日本の歴史的、文化的遺産から断絶されたことです。三世の中には日本語が話せないことが恥ずかしくて、見下されるのではと恐れ、日本に来ることをためらう人もいます。強制収容によって私たちが体験した「恥」の意識が次の世代にまで伝わっていて、日系人であることを誇りに思えないでいるのです。

日系アメリカ人の経験について関心を持っている学生のみなさんに伝

えたいことは、今回の講演会のような交流の場が今後さらに増えることを私も望んでいるということです。戦後、日系アメリカ人は、日本人である部分のごくわずかである、ほぼアメリカ人であることを社会に対して証明しなければなりませんでした。その結果日本や日本の文化との間に断絶が生まれてしまい、そのために失ったものを取り戻さなくてはなりません。例えば私の住むサンフランシスコに日本街がまだ存在していることは素晴らしいことだと思いますし、このことについて私たちは対話を深めていくべきです。特に公式謝罪と賠償補償が実現した後、日系人の中から恥の意識が薄れはじめ、博物館や歴史的な教育プログラムをつくろうという動きは近年より活発になっています。体験者は自分の経験談を語りはじめ、日本語が読める人は私の父がどのような俳句をつかったのかを私たちに教えてくれます。長い間私たちがアクセスできなかったものを知ることができるようになったことはとてもすばらしいことです。興味を持って質問をし、行動を起こし、意見の交換をする。そういう時が来ています。日系アメリカ人が日本からの学生たちと喜んで楽しんで交流できるようになると、日米関係はよりすばらしいものになるのではないかと考えています。

小林 すばらしいですね。関心を持って対話を続けていくというポイントは次の質問にも関連してきます。ここで、講演で少し触れられたトランプ大統領に関わる質問に移りたいと思います。講演の中でもご紹介があった、お母さまが収容所で受け取ったキルトの話に関する学生からのコメントを紹介します。この学生は、もし自分の周りで不公平なことが起きたとき、自分は何ができるのだろうかかと自問しています。お母さまにフェンス越しにキルトを投げ入れたクエーカー教徒の女性を引き合いに出し、次のように言っています。「困っている人を助ける行為をすることで人々に希望を与えることができると思う。大変な状況の中で誰にでもできることではないと思うが、行動を起こせる人の勇氣は素晴らしいと思う。自分自身と自分の家族だけでなく、助けが必要な他の人のことを考え、それを行動に移せる人に自分になりたいと思う。静子さんを助けた人のような行動をとれる人間に自分もなりたい」このコメントは今



後このようなことが起きた時に私たちには何ができるのかという重要な問いをなげかけているように思います。トランプ大統領就任後の米国の現状もふまえながら、ご感想をお願いします。

イナ 戦後、日系アメリカ人が収容所から釈放された後、私たちは目立たないように、問題を起ささないようにと言われました。公共の場では日本語はしゃべらないように、日系人どうしでかたまらないように指示されたのです。主流のアメリカ社会に同化するよう強いプレッシャーを受ける一方で、根強く残る偏見や差別にもさらされ、職や住む場所を見つけるのに大変な苦労をしました。

徐々にではありますが、戦後日本街も再成されていきました。とはいえ、特に私の両親の世代は日本との断絶を余儀なくされました。断絶の大きな理由は強制収容のトラウマです。日米開戦直後多くの日系アメリカ人は日本に関連するものをすべてを焼くなどして処分しました。その中には日本人形や家族の写真なども含まれています。FBIの捜査官が個人の家にまで立ち入って、日本のスパイではないのか、日本政府に協力しているのではないかと疑いの下、家宅捜査し、様々な物品を押収していったからです。人々が処分したものの多くは個人にとって、家族にとって、大切な宝や遺品、思い出の品などでした。

強制退去、収容というトラウマを体験した多くの人は戦後そのことについて何も話さなくなります。なにかも忘れたかったのです。痛々しい過去は忘れて次の人生へと進みたかったのです。政治的なこと、不正や不公平に思われること、人種差別、一定のグループに対する差別的待遇に関して、日系アメリカ人のコミュニティは戦後ほとんど反対や抗議の声をあげることはありませんでした。

しかし今、このような状況は変わりつつあります。二〇一六年の大統領選挙以降、私たちをかつて強制収容に追い込んだ時と同じような発言や行動をよく耳にするようになります。イスラム教徒の人々の登録や、特定の国からの入国禁止令、イスラム教のモスクの強制捜査などです。二〇〇一年九月十一日の同時多発テロ事件以降、米政府はイスラム教徒のコミュニティを常に監視してきました。社会全体が漠然とした恐怖を抱

いているとき、憎しみを向ける対象となる特定のグループをつくり、そのグループを監視し、弾圧し、除去することによって「安心」を得ようとする。

非常に不合理なこの雰囲気は九・一一のテロ以降、米国内で増長しています。このような状況の中、第二次世界大戦中に同じような憎悪の矛先を経験した日系アメリカ人三世として、私たちは今まで以上に抗議の声をあげる必要性を感じています。全国規模のデモ行進に参加して、抗議の声をあげて、権利を守るための主張をしています。高齢で白髪交じりの日系アメリカ人のおばあちゃんたちが、日系アメリカ人の強制収容所の名前と *Never Again* と書かれたTシャツを着て、様々なイベントやデモ行進に参加しています。するとTシャツについての質問を受けることがよくあります。このようにして、私たちの体験、歴史について対話をするきっかけが生まれます。このTシャツは過去に起こったことを言っているものの、その実今、現在米国で起きていることでもあるのです。

私はこれまでに様々な日系アメリカ人の団体の活動に関わってきましたが、最近新しいドキュメンタリー映画、*And Then They Came for Us* (二〇一七)の製作にも携わりました。昨今の米国の移民、難民やイスラム教徒に対する姿勢、発言に対し、七十年以上前に日系アメリカ人に対して犯された過ちを繰り返してはならない、そして米国の民主主義を守るためには間違っていることに対して抗議の声をあげなければならぬという思いを強く反映した映画です。この映画の中にサンフランシスコの日本街で日系アメリカ人のコミュニティが初めて開いた政治的な集会の様子が収録されています。イスラム教徒の人々や団体も参加しました。彼らと共に立ち、彼らが不公平に扱われることに対して抗議の声をあげました。私たちは不合理な憎しみの矛先を向けられ、差別されることを、身をもって体験しています。社会に広く蔓延した差別的意識や特定の宗教に基づいて一定の人々を貶めるといったことがどのような悲劇的な結果を招くかということもよく理解したうえで抗議行動です。

私はまた、米国に亡命を申請している中南米出身の女性と子供たちの待遇に抗議する運動にも深く関わってきました。彼らは年齢に関わらず、



手錠をかけられ、テキサス州にある入国者収容所に収容されています。私は実際に収容所を訪れましたが、その実情は監獄の房にベビーベッドが置いてあるだけで、彼女たちは逮捕されることを前提に、犯罪者として扱われています。国際法は、何人も自国で命の危険を感じるとき、他国への亡命を申請することができ、そこで人間らしく扱われるべきであると定めています。米国の現状はそれに準拠していません。私はこうした女性たちに弁護士を雇い、正当な亡命申請をしていることを証明できるように働きかけている非営利団体の一員として活動しています。

私たち日系アメリカ人は今まで以上に政治的になっています。声をあげることに対してより革新的に、積極的になっています。一人一人が声をあげるということは民主主義の基本理念です。黙っているのは民主的な国である能力を失ってしまっています。

小林 とても残念ですが、時間の関係でこれが最後の質問になります。講演の最後に四世、五世のご家族の写真を紹介されました。今日お話された内容や日本に対して、日系の若い世代はどのように反応されているのでしょうか。

イナ 非常に幸運なことに今、日系であるということは「かつこいい」と思われています。今回の訪日にも十代の孫たちを連れてきましたが、アメリカでは日本のアニメの人氣が高いので、彼らはジブリ美術館を大喜びで訪れます。私たちの世代や戦後直後に生まれた日系人は米国の主流文化への同化のプレッシャーを受け、また親たちが大きな不安を抱える中で育ちました。私たちは将来の安定のため、エンジニアや医者、弁護士など、ある意味、堅実な職業につくプレッシャーを受けてきました。大学にしてもカリフォルニア大学バークレー校やスタンフォード、ハーバード、プリンストンといった一流有名大学に入学しなければ、その家族は何かおかしいのではと言われたほどです。私の親の世代は、米国社会に受け入れられる唯一の方法が、一流大学を卒業して堅実な職業につくことだと信じていました。その代償として、私たちの世代から、俳優、女優、ダンサー、詩人、など創造的な表現をする職業についた人はとても少ないことが挙げられます。そうした職業は安全と安定を保障できな

かったからです。

しかし四世になるとさまざまな創造表現に打ち込む人たちがでてきます。私の息子の一人はAdrian Tomineという漫画家です。『ニューヨーク』という雑誌の巻頭のイラストも描き、日本にも多くのファンがいます。もう一人の息子は作家でもあり環境保護の運動にも携わっています。二人とも大学は卒業しましたが、私たちの世代に比べより自由な精神を持ち、より多角的な選択肢から職業を選んでいます。このことは私にとっては進歩だと思えます。一年前、感謝祭の時に一家が集う夕食の席で、私と一緒に日本に行きたい人をつのつたところ、全員が手を挙げました。今回の訪日前にも初対面でのあいさつや「ごちそうさま」と言うことを日本語で練習してきています。若い時から、日系の血をひくことを、日本の歴史的、文化的遺産と関係していることを誇りに思っているかと願っています。訪日を楽しむ子供たちをみていて、とても樂觀的な気持ちになります。

小林 “Grandma Trip”（おばあちゃん旅行）中のご家族との大切な時間をさいて、本日は本校にお越しくださり、本当にありがとうございます。みなさま、サツキ・イナさんにもう一度盛大な拍手をお送りください。どうもありがとうございます。